

高松市 研究のあゆみ

1 研究主題 児童が言葉を通してつながり合う国語科授業の創造

～「課題を解決したい」という願いをもち、『話せた・聞けた・書けた・読めた』

という自己の伸びを実感する授業づくり～

2 研究活動の概要

(1) 4月 研究組織作り、研究主題の設定、年間計画作成

6月 授業をもとに、研究を深める

北ブロック 新番丁小学校（4年）ヤドカリとイソギンチャクのかいせつブックを作ろう

「ヤドカリとイソギンチャク」

亀阜小学校（2年）ことばで絵を伝えよう～1年生に伝えよう～

南ブロック 林小学校（3年）分かりやすいレポートを書こう

三溪小学校（3年）はりねずみと金貨

(2) 7月22日 夏季研修会 6月の授業の成果と課題を発表

(3) 11月 授業をもとに研究を深める

北ブロック 栗林小学校（6年）物語を読んで、考えたことを伝え合おう「海のいのち」

花園小学校（5年）物語のおもしろさを解説しよう「注文の多い料理店」

南ブロック 前田小学校（3年）想像したことを伝え合おう「モチモチの木」

川添小学校（1年）友だちとはなしをたのしくつなごう

3 研究内容

(1) 自分の学びを認識できる振り返りのあり方

振り返りの視点の与え方や時間の確保など、自分の学びを言語化するための手立てを工夫する。

北ブロック

2年「ことばで絵を伝えよう～1年生に伝えよう～」

・伝える場面をタブレットで録画することで、自分の伝え方が可視化でき、改善点を見つける際に役立った。また単元を通して振り返りを行うことで、学ぶ楽しさや言葉で伝える楽しさを実感していた。教師自身も児童の変化がよくわかった。

6年「物語を読んで、考えたことを伝え合おう」

・毎時間振り返りの時間を設定することで、授業で話し合ったことをもとに自分の考えを積み重ねていった。まとめには本時の問いに対する答え、振り返りには友だちから学んだことを書き分けることで、友だちから学ぼうとする意識につながっていた。

5年「物語のおもしろさを解説しよう」

・毎時間、同じ視点でワークシートを活用して振り返りを行うことで、前時や単元の初めと比較して、自分の読みの深まりを感じ取れていた。

南ブロック

3年「分かりやすいレポートを書こう」

・授業ごとに学んだことを顔の表情を選択し色を塗り「振り返りの木」として積み重ねていくことで、学びを視覚化できた。自己を振り返り、力がついた部分や足りない部分を自分で意識できていた。

3年「はりねずみと金貨」

・あらすじのまとめ方のポイントに沿った学習の振り返りを行うことで、各場面の出来事のまとめ方を会得していく実感をもたせることができた。

3年「想像したことを伝え合おう」

・それぞれの場面で、中心人物を「～な豆太」とまとめ、根拠となる部分をワークシートに残していくことで、豆太の変容を捉えながら学習を振り返ることができた。

1年「友だちとはなしをたのしくつなごう」

・授業の初めと終わりに振り返りの時間を取りワークシートを活用することで、自分の頑張りの積み上げを可視化でき、単元を通して児童の意識がつながる授業になっていた。しかし、振り返りを書くとき困っている児童もいたため、何を書くか振り返りの観点があってもよかった。

(2) 「課題を解決したい」という関心を高める単元構想や学習問題の工夫

児童の実態把握や単元で付けたい力を見極め、児童が関心をもち続け、主体的に学ぶ単元構想や学習問題の設定を考える。既知を意識した学習問題を提示する。

北ブロック

4年「ヤドカリとイソギンチャクの解説ブックを作ろう」

・解説ブックを作って2年生に説明するという相手意識をもたせる単元を設定したことで、「絵や挿絵をもっと書いたら分かりやすくなるのではないか」「意味を調べて2年生にも分かりやすい言葉にしないで」など、2年生に分かりやすく紹介するために主体的に考えることができた。

2年「ことばで絵を伝えよう～1年生に伝えよう～」

・タブレットを活用し、録画しながら行うことで児童の意欲化につながった。1年生に伝えようという意識をもつことで、1年生に伝わる言葉を考えたりゆっくり話したりするなど、相手意識をもって学習に取り組むことができた一方、1年生に伝えるときの言葉には苦戦している児童もいた。

6年「物語を読んで、考えたことを伝え合おう」

・初発の感想で疑問に思ったことをグループで共有し、話し合いたいことを決めて中心課題に迫っていくことで、自分たちの問いを解決しながら、見通しをもって学習に取り組むことができた。

5年「物語のおもしろさを解説しよう」

・教材文を読む際に、面白いと思ったところに線を引き、それを全体で共有することで、人によって感じ方が違うことに気づかせ、友だちに面白さを解説したいというゴールを設定した。また教師自身が解説文を提示することで、見通しをもって学習に取り組むことができた。

南ブロック

3年「分かりやすいレポートを書こう」

・「自然のかくし絵」を学び、抱いた疑問を解決することをレポート作りとつなげることで、児童の「書きたい」「面白そうだ」という意欲につなげた。また4年生に紹介するという目標を設定することで、

分かりやすいレポートを書くための意欲につながった。

3年「想像したことを伝え合おう」

・児童の初発の感想からみんなで考えたい問いを授業で扱うことで、「課題を解決したい」という意欲につながった。

1年「友だちとはなしをたのしくつなごう」

・自分が生活科の秋見つけで見つけた葉っぱなどで作った作品を紹介する活動を設定することで、見立てる面白さを感じるとともに、友だちに話したいという意欲化につながった。

(3) 「話せた・聞けた・書けた・読めた」という自信がもてる指導過程の工夫

自分が想像していたことが、できた、分かったという成功経験を積む機会を設けることで、付けたい力が身に付き、課題解決に対する自信がもてる学習の進め方や具体的な働きかけを考える。

北ブロック

4年「ヤドカリとイソギンチャクの解説ブックを作ろう」

・A3の用紙一枚に単元を通しての振り返りを書くことで、見通しをもって学習に取り組めるようにし、活動に自信をもてるようにした。児童によっては、振り返りシートがうまく活用できない児童もあり、書く量や更なる視点の明確化が課題である。

2年「ことばで絵を伝えよう～1年生に伝えよう～」

・「伝え名人の技ブック」を作成し活用していくことで、順序を表す言葉や様子を表す言葉や初めに何を書くかを説明するなど、話すときに意識することを学び、活用できるようにした。またグループ活動を行い、お互いの良い点・改善点を話し合うことで、次の活動では自信をもって伝えられていた。

6年「物語を読んで、考えたことを伝え合おう」

・教師の声かけなどにより、何を発言しても安心できるクラスのもと、グループ活動で話しやすい環境で話したり、話し合うことで課題を解決するという意識をもったりすることが、児童の話したいという意欲につながった。

5年「物語のおもしろさを解説しよう」

・扉の文章の面白さを見つけるために、全体を3つのグループに分けそれぞれで読み取りを行う。「面白いと思った表現」「どう感じたか」「おすすめ度」「一言コメント」と4つの観点にまとめ、全体で発表する活動を取り入れることで、グループで話し合う必然性が生まれ、伝えたい、聞きたい、という意欲化につながった。

南ブロック

3年「分かりやすいレポートを書こう」

・タブレットを活用しカード操作を行う活動を取り入れ、調べたことを整理し見出しづくりをすることで、レポートを書けそうだという見通しにつながられた。教師の用意した共通教材を整理し、自分の調べたメモにつなげていくことで、自信をもって活動に取り組む児童の姿が多く見られた。

3年「はりねずみと金貨」

・各場面の登場人物や時、場所、それぞれの動物がくれた物に丸をつけ、様子や気持ちに関する叙述に

線を引き各場面のあらすじをまとめていくことで、ポイントをおさえながらあらすじを書くことができた。しかし児童自身が叙述に戻って考える時間や、場面の内容とあらすじをまとめるための時間の確保などが難しかった。

3年「想像したことを伝え合おう」

・タブレットを用いて、様子を表す言葉の色分けのカード操作を行うことは、児童の発達段階にも合っており、話しやすく児童の「読めた」という実感につながった。国語が苦手な児童も興味をもって取り組めた。

1年「友だちとはなしをたのしくつなごう」

・タブレットを活用し、話し合いの様子を撮影して振り返ったり、話し合いを見ている友だちに「いいねカード」を挙げてもらいながら聞いてもらったりすることで、自分の話し方が、よかったと振り返ることができた。

【今年度の研究での成果】

○自分の学びを認識できる振り返りのあり方

授業の最後や単元の終わりに学習の振り返りを行うことで、自分にどんな力が付いたか、また足りないのはどんな力かを児童自身で考えることができた。単元を通して毎時間振り返りを行った授業では、児童が自分の学びを積み重ねていったものを可視化でき、自己肯定感の高まりにもつながったと考えられる。

○「課題を解決したい」という関心を高める単元構想や学習問題の工夫

児童が主体的な学ぶ意欲をもつために、どの授業でも課題設定を工夫していた。相手意識をもたせ具体的な相手を設定しその人に伝えるためにより良い方法を学んでいくこと、また児童自身の疑問や問いを取り上げそれを解決するために学習していくことの、大きく分けて2つの課題設定の工夫があった。もしくはその両方を取り入れていた。どちらも児童の「やりたい」「話したい」という内面からの学習意欲を刺激しており、単元を通しての児童の主体的な学びの姿が見られた。また、多くの授業で友だちとの対話を行うことで、考えを比較したり客観的に自分を評価してもらったりするなど、児童同士での学び合いにもつながっていた。

【今年度の研究での課題】

○学びの振り返りの在り方

本年度は、振り返りに視点を置いて指導案を検討したが、何を振り返らせるかの議論がなされた。

事前研等の話し合いの中で、国語科でどんな力をつけるのかを話し合った際に「言葉の力」を児童につけなければならないという原点に返ることとなった。今後は、児童が授業前にもっていた言語認識が、授業を通して、変化したことをどのように味わわせ、その変化に気付かせるような学習の展開についてさらに研究をすることが必要である。さらには、その気づきを振り返りに表現させることが重要である。

○タブレットの活用

今回、多くの授業でタブレットの活用が見られた。児童の主体的な学習の参加を促す物としての活用。思考を深め、書く活動の見通しをもたせるカード操作を行う物としての活用。また動画機能を用いて自分を客観的に見てより良い伝え方・話し合いの仕方へとつなげる、自分を振り返る物としての活用。児童の学びを深めるためのツールとして、今後どのような活用の仕方ができるか考えていけると良い。

丸亀支部 研究のあゆみ

1 研究主題

児童が自ら学ぶ国語科学習の展開

- つけたい力を明確にし、その力につながる児童の「関心」を高めたり
「自信」をもたせたりする授業づくり —

2 研究活動の概要

- (1) 4月13日 研究組織作り、研究主題の設定、年間計画作成
- (2) 6月1日 飯山北小学校 研究授業・討議
1年 「きいて つたえよう」
- (3) 11月30日 城辰小学校 講義・演習
講義・演習Ⅰ：「小学校と中学校の接続を意識した国語教育の在り方について」
講義・演習Ⅱ：「効果的な ICT 機器の活用」

3 研究内容

- (1) 6月1日 飯山北小学校 研究授業

1年 「きいて つたえよう」 授業者 吉村 まさよ教諭

目標 教師の指令を聞いて、その内容を正確にグループの友達に伝える活動を通して、大事なことを落とさずに聞き取るためのこつや注意点に気づき、仲間と話し合ったり、今後に活かそうとしたりすることができる。

① 主体的に学ぶための工夫

教師からの指令をグループの代表児童が聞き、その言葉をグループの友達に伝える活動を行った。ゲーム性のある活動であるため、その流れを共通理解し、児童全員が安心して取り組めた。

② 豊かに関わり合うための工夫

正しく聞き取れたことだけを喜ぶのではなく、どうしてしっかりと聞き取れたのかを振り返る時間を持ち、それをグループの仲間と見つけることができた達成感を味わわせることができた。



【成果と課題】

- 児童の意識の流れに合わせて学習活動を組み立てていたため、児童が主体的に取り組めていた。確認ボードも評価するのに効果的だった。シールなども意欲化につながった。
- 個人差がある中で、できる限り個に対応しようと努めていた。
- 同じ指令がよかったのではないかと。児童に必要感をもたせる場面設定をすることで、生きて働く力になる。
- 待ち時間をどう使うか。活動するグループとそれを見るグループに分けて、相互評価やモデリングを取り入れることも考えられる。

(2) 11月30日 城辰小学校にて 講義・演習

① 講義・演習Ⅰ：丸亀市立東中学校教諭 岩崎 和子氏

「小学校と中学校の接続を意識した国語教育の在り方について」

- ・学習規律や学習用具の違いについて
 - 国語の授業の持ち物（国語4点セット＋2冊）・・・物の管理、提出物の大切さ
 - 成績について・・・進路保障に向けて大切、提出物や授業態度も5段階評価
 - 筆記用具など・・・シャーペンの使い方や持ち物のルールを守れることも大切
- ・中学校の国語科で学習すること（小学校と中学校の違い、共通点）
 - 文法、古文、漢文は小学校高学年から覚えておくといよい。苦手意識をなくす。
- ・演習・・・品詞の学習（実際に教員もやってみると難しさがよくわかる）

② 講義・演習Ⅱ：附属坂出小学校教諭 東 泰右氏 「効果的なICT機器の活用」

- ・ICTを使う目的・良さ
 - 子どもの興味を引き出す、授業の効率化、個に応じたきめ細かい指導、学習履歴の蓄積と振り返り
- ・国語科でのICT活用のポイント
 - まずは使ってみる・・・学びの機会を保障する。
 - ICTの強みを生かす・・・ICTならできることをする。
 - 子どもと良さを共有する・・・良さを実感し、自ら使おうとしていく。
 - 選択できるようにする・・・いろいろと試しているうちに、自分に合ったやり方に気づき、選択できるようにする。
- ・インクルーシブ教育の視点から
 - 書き写し、書き直しの度にイライラしている、困っている子を救えることもある。

4 県の研究との関連

【今年度の研究の成果】「自信・関心」を高める

児童の意識の流れに合わせて学習活動を組み立てたことにより、児童が主体的に取り組む、達成感を得たことが自信につながった。グループでの交流を取り入れることで、互いのよさに気付くことができた。

【今年度の研究の課題】

さらに主体的な学びにつなげるために、必要感のある学習課題を設定することが大切なのではないか。自信をもたせるためには、話し方の良さや頑張りを全体場で認め、共有することも必要である。

坂出・綾歌支部 研究のあゆみ

1 研究主題

児童が自ら学ぶ国語科学習の展開
—付けたい力を明確にし、その力につながる児童の「関心」を高めたり
「自信」をもたせたりする授業づくり—

2 研究活動の概要

昨年度に引き続き、付けたい力を育成するために、付けたい力に対する「関心」を高めたり、「自信」をもたせたりする授業づくりに焦点をあてて研究を進めた。付けたい力そのものに関心をもたせることや、スモールステップで学びを積み上げ、できる手応えを味わわせることで子どもたちの学ぶ意欲は大きく変わってきている。さらに今年度は、ねらいや授業の本質に迫る支援を明確にして、子どもたちが楽しい、おもしろいと感じながら関心を高める、自らの成長を実感できる授業の高まりをめざして研究を進めた。

3 研究内容

(1) 6月1日 授業実践動画を視聴しての研究討議

第3学年「自然のかくし絵」 授業者 坂出市立松山小学校 教諭 稲村 夏実
本単元は、説明文の「読解の基礎」である。大事な言葉や文に着目して、段落ごとに書かれている内容を読み取る力を付けることをねらいとしている。さらに、書かれている内容だけではなく、筆者の述べ方の工夫に気付ける力を育てることをめざした。内容を視覚的に理解するためのペープサートの活用や、繰り返し出てくる言葉、原因と結果を表す言葉「そのため」や「～いると」などの表現に着目させることで、大事な言葉を見付け、それを自分でまとめる学習を展開した。

(2) 10月19日 授業実践動画を視聴しての研究討議

第2学年「あそび方をせつ明しよう」 授業者 綾川町立羽床小学校 教諭 土岐 裕子
本単元では、生活科「せかいでひとつ わたしのおもちゃ」と関連させ、手作りおもちゃの遊び方を説明する文章を書くという言語活動を設定した。伝える相手を1年生に設定することで相手意識や目的意識をはっきりさせ、書く意欲を高めるとともに、文章を読み返して間違いを正したり、語と語や文と文との続き方を確かめたりして書く力を付けることをねらいとしたものである。本時は、教師の例の提示や、ペアで実際に遊びながら推敲していく活動を通して、意欲的にカードや言葉を付け加える児童の姿が見られた。

4 県の研究との関連

【今年度の研究の成果】目的意識をもち、主体的に学習に取り組む児童の姿

実践(1)(2)とも、単元のゴールと本時の学習課題のつながりが明確であったため、児童が本時の課題解決の価値を実感し、意欲的に活動に取り組めた。また、付けたい力の習得に向けて、(1)では問い返しを用いて言葉の性質に着目できる教師の支援が有効であった。この教師の発言がモデルとなり、子ども同士のペア対話にも生かされていた。(2)では、子どものつぶやきを引き出す教師の発問「これはどうなの」「どうやって」「〇〇って何」が有効であった。

【今年度の研究の課題】自分の成長を見付けさせる支援

課題解決後の振り返りの際に、学び方や次にしたいこと等の振り返りの観点を示すことで、児童自身が自己を見つめ、身に付いた力や学ぶ意味を実感することができていた。発達段階に応じて自分の成長を見つめさせる支援として、学び方に関する観点を示すとともに、自分のよさに目を向けさせる手立て、自分の成長を捉えた上で、次にしたいことを見いだす支援等をご指導いただいた。

仲多度・善通寺支部 研究のあゆみ

- 1 研究主題** 学ぶ意味を児童が実感する国語科の授業づくり
—付けたい力を身に付けさせるために、自己を見つめることを促す—
- 2 研究活動の概要**
令和4年6月 紙上研修 善通寺市立筆岡小学校 福家 みさと教諭
2年「スイミー」(教材文「スイミー」光村図書)
令和4年11月 研究授業 善通寺市立筆岡小学校 森 麻子教諭
6年「やまなし」(教材文「やまなし」光村図書)

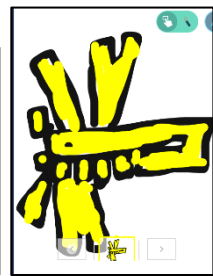
3 研究内容

第1回研究授業では、「C読むこと」の「(1)エ 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること」を重点指導事項とし、作品中の比喩表現を根拠に言葉のもつ豊かさを児童に感じ取らせることを目標とした授業や単元構想が提案された。

本時について、具体的には、スイミーが、すばらしく、おもしろい海の世界に出会った場面の、「にじ色のゼリーのようなくらげ」、「水中ブルドーザーのようないせえび」、「ドロップみtainな岩」を取り上げた。これらの比喩表現から受けたイメージを児童が自由に語り合い、ロイロノートで具現化することを通して、スイミーの心の動き、海の世界の楽しさやすばらしさを読み取ることを目指した。

授業中は、児童が比喩表現から感じ取ったことを自由に語り合った。ロイロノートに表現した自分なりのイメージを、「『水中ブルドーザーのような』だから、強そうないせえびにしました。」などと、比喩表現を根拠に説明した。「水中ブルドーザーのようないせえび」に対するイメージを語らう中で、「ぐいんと」、「ドンとした感じ」、「力持ち」など、海の生き物の質感に関する具体的な言葉が交わされ、尾が曲がった力強いいせえびに描き換えた児童も見られた。また、「ブルドーザーは土を一気に集められる大きな機械だから、いせえびのはさみの所をもう少し大きくした方がいいかな。」と、これまでの経験や友だちの考えに触れることができた。このようにして、海の世界を具体的にイメージし、児童の言語感覚を豊かにするというねらいに迫ることができた。

討議は各校で意見をまとめる形とし、「本単元の構成や本時のねらいについて」を中心に話し合った。



第2回研究授業では、「C読むこと」の「(1)エ 人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること」を重点指導事項とし、各自が想像した谷川の底の世界のイメージを語り合うことで語感を養うことを目標とした授業が提案された。具体的には、「五月」と「十二月」の二枚の幻灯の世界を対比させて、心惹かれた理由を明確にして語り合うことを通して、自分の捉えと他者の捉えの違いに気付き、自分の言語感に新たな意味づけができることを目指した。

本時では、「五月の『日光の黄金』という言葉から、光が力強く放たれている感じがするからいいと思う。」、それに対し、「十二月の『月光』という言葉から、月から降り注いできて、包み込むような光のイメージができる。」などと、ひとつひとつの言葉や表現から受けるイメージを語り、自分にはなかった捉えに気付いていくこともできた。また、十二月の「トブン」が、「ドブン」や「ポチャン」ではないことから、濁点の有無や言葉の響きを根拠にして、やまなしやその周りの情景を具体的に語ったりイメージを広げたりする姿も見られた。このようにして、本作品独特の色彩豊かな表現や比喻を大切にしながら、谷川の底の世界のイメージを語り合い、新たな語感に触れる場となった。

討議では、①児童が言葉の意味認識を深め、イメージの更新をどのように図っていくか、②学ぶ良さを感じさせるための工夫について協議した。



4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】

○ 自力解決中の方法の吟味

どちらの授業でも、「言葉や表現から受けたイメージを語り合う」ことを学習課題に設定した。児童が語り合う中で「〇〇という言葉から～の感じがする。」と自分の言語感覚に気付いたり、「〇〇の言葉にはまだ気付いていなかったけれど、確かにそうだな。」と言葉への認識をさらに深めたりする姿が見られた。このように言葉を認識していく経験を積み、読み方を学んでいくことで、異なる作品に出会った際にもその言葉や表現に主体的に関わっていこうとする態度が養えるであろう。

【今年度の研究での課題】

○ 児童が学ぶ意味を実感するための手立て

言葉を根拠に作品の全体像や内容を明確に捉えられることで、児童は学ぶ意味を実感できる。そのためには、どちらの授業でも児童の思考を焦点化できるような教師の教材分析が必要であった。

「スイミー」の授業では、海の生き物たちについて想像を膨らませて絵に具現化する活動に時間がかかり、比喻表現にこだわって思考する時間を多く取ることができなかった。そこで今後は、児童の言語感覚が深まったり広がったりしていくように、

「〇〇という言葉から～と感じたので、△△のように描きました。」という説明をさせ、作品に用いられた表現に焦点化していきたい。

「やまなし」の授業では、児童が「五月」と「十二月」のつながりを全体的に捉えられるようにするためには、対比的な言葉に焦点化していく必要があった。例えば、陽の「日光」と陰の「月光」である。これらに対して児童が持っている言語感を、児童の言葉で語らせることで対比的な世界をさらに捉えることができたと考えられる。

三豊・観音寺支部 研究のあゆみ

1 研究主題

学ぶ意味を子どもが実感する国語科の授業づくり
—付けたい力を身に付けさせるために、自己を見つめることを促す—

2 研究活動の概要

- (1) 4月20日(水) 三観小研国語部理事研修会(三豊市立桑山小学校)
 - ・ 組織づくり・ 年間計画作成・ 研究内容の検討
- (2) 10月17日(月) 三観小研国語部理事研修会(三豊市立詫間小学校)
 - ・ 指導案検討
- (3) 11月29日(火) 三観小研国語部部員研修会→感染症予防のため理事研修会に変更(三豊市立詫間小学校)
 - ・ 研究授業 1年「おもいうかべながらこえに出してよう」
(教材 「おとうとねずみチロ」) 授業者 伊賀 ユミ教諭

3 研究内容

11月の研究授業では、「C読むこと」イ「場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること。」エ「場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。」を重点指導事項とし、音読を通して人物や場面の様子を想像したり、想像したことを伝えるために音読したりすることを目標とした授業が提案された。本時では、以下の点に留意して授業が行われた。

① 言葉による見方・考え方を鍛える

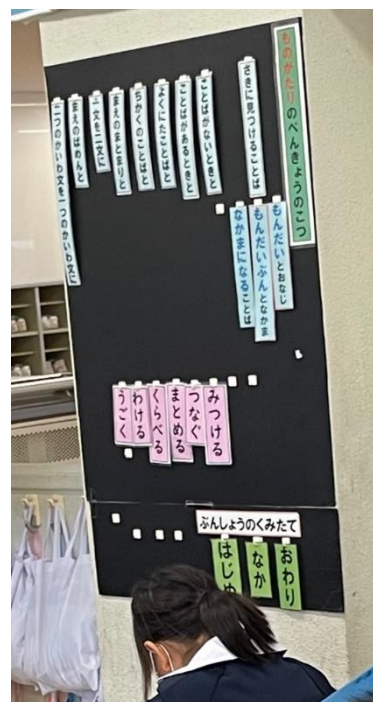
人物の行動等を具体的に想像できるように、既習の見方・考え方を表した「物語を読むコツ」カードや、想像する観点を表した「おもいうかべよう」シートを提示した。

② 児童主体の学習問題づくり

児童の疑問を生かした学習問題を設定するため、前時に児童から出た問いを次の学習問題として解決していった。本時では、「チロはどんないいことをかんがえたのか」という学習問題をグループで話し合った後、全体で吟味する活動を行った。

③ 振り返りの工夫

学んだ見方・考え方を使うことができたかどうかを振り返られるよう、物語の読み方のコツが書かれたシートを使ってチェックする活動を行った。また、ペアで相手の振り返りに対する感想を伝え合うことで、学びを認め合える場となるようにした。



【討議内容】

- ・ 「ちかくのことばと『つなぐ』」「よくにたことばと『くらべる』」という読み方のコツを使って、学習問題を解決しようとしていた。これらを授業の中で、「読むコツ」として積み上げていくことで言葉による見方・考え方を鍛えることができる。
- ・ 話し合い活動では、一人の意見に対し、全員が反応したり、吟味したりすることができていた。また、全体の場合でも、自分たちのグループの考えと友だちのグループの考えを比べる場が設定されていた。グループで話し合った考えを更に生かすために、全体の場合で確認したり吟味したりする場があるとよかったのではないかな。
- ・ 振り返り活動は、メタ認知させる上でも重要である。読みのコツをチェックする形式は有効であった。
- ・ 「…」があるときとないとき、「おばあちゃあんと」「おばあちゃん」、「チロだよ。」と「チロだよ。」を『くらべる』、また挿絵と『つなぐ』と、さらに想像が広がったのではないかな。
- ・ 子どもから出た学習問題は、意欲につながる。ただ、本時の学習問題は、捉えにくいと感じた子もいた。登場人物の行動に目を向けた学習問題でもよかったのではないかな。



4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】

課題解決における支援「学習の成果や学び方の良さに気付かせるために」

- ・ 授業の中で、児童自ら「見方・考え方」を働かせることができるように、本単元までに獲得した読みのコツをカードにして掲示したり、必要に応じて板書の中に取り入れたりして活用した。それにより、児童に付けたい力を意識させることができていた。また、それらの観点を使えたかどうかチェックすることで、子どもたちが自分の成長や学びの良さを振り返ることができることが分かった。

【今年度の研究での課題】

課題解決中における支援「より納得する考えに向けて再考させるために」

- ・ 自分の考えを再度見つめ直し、より納得できる考えにしていくための支援について、発達段階に合った具体的な方法を探っていきたい。

さぬき・東かがわ支部 研究のあゆみ

1 研究主題

児童が成長を実感する国語科学習の在り方
—付きたい力の共有化と振り返りを生かす支援の工夫—

2 研究活動の概要

- ・ 5月13日（金） 研究主題、研究組織についての事前研修会
決定事項と今年度の重点事項について国語部員にメール等で周知
 - ・ 11月15日（火） 国語科学習指導改善・充実に向けた研修会
研究主題について
今後の取り組みについて
来年度に向けて
 - ・ 11月22日（火） さぬき・東かがわ教育文化祭（書写部門）作品評価研修会
作品搬入
作品の評価研修
県出品作品、巡回作品の選出と搬入準備
県出品作品、巡回作品を含む全作品の展示
 - ・ 11月27日（日） さぬき・東かがわ教育文化祭作品搬出
- ※ 6月14日、11月15日に予定されていたさ・東小研国語部会の集合研修は、コロナ感染症拡大のため、中止

3 研究内容

今年度は、集合研修が全て中止になり、研究授業や討議などが行えなかったが、有志により研究主題について話し合う機会を取り、各部員に周知して研究を進められるようにした。

（1）研究主題について

国語科の授業で学ぶことの意味やよさが感じられていないことや、自分にどんな力が身に付いたかを実感できていないという実態から、付きたい力の共有化と、各場面における自己の振り返りを生かす支援の実践を積み上げていくことを研究の重点とした。

① 付きたい力の明確化と共有化（言葉による見方・考え方を働かせて）

教師が付きたい力を明確にし、児童にも見通しをもたせる。（ねらいの共有）

単元のゴールを児童と共に探る。

② 児童が、自己を見つめる実践を蓄積する。

授業を3つの場面に分ける。

- ・ 課題設定（導入）
- ・ 課題解決中（関わり）
- ・ 課題解決後（まとめと次時へのつながり）

※ 発達段階に合わせて、教師の声かけで、学びへの自覚や自信を深めていく。

※ 大きく場面毎の振り返りや視点を絞った振り返りで、自己を見つめることを促す。

③ 学びの土壌づくり（基礎・基本の充実と学級経営）

- ・ 自信をもたせる、もてる学習指導
- ・ 支援の工夫
- ・ 学習環境

④ 書写作品の評価についての研修

評価の観点を共通理解する。（昨年度、書写部員だった教員から観点について学ぶ）

(2) 今後の取り組みについて

「書く」領域において、研究主題に沿って研究を進めていくことを確認した。児童が書く活動を行う際に、困っていることやより良い文章にするために必要なことを支援できるよう、明確な視点をもって振り返りをさせていきたい。メタ認知の観点から、児童が自己内調整をしながら、「書く」ことに向かい合うためには、どんな支援や声かけが必要か、児童のその姿をどう見取っていくか研究をしていくことが必要である。そのための実践を積み上げ、共有できるようにしていきたい。

4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】

- ・ 研究主題について、有志ではあるがしっかり話し合えたことで、研究の見通しをもつことができ、部員に周知できた。各自が振り返りの場面を中心に研究を進めることができた。

【今年度の研究での課題】

- ・ 研究授業が行えなかったことで、具体的な振り返りの方法やそれに基づいた支援の在り方についての協議が十分できなかった。部員各自が指導方法を模索してきたので、成果を持ち寄り、四国大会で提案できるようにまとめていきたい。
- ・ 感染予防ということで、なかなか集合研修ができなかったため、全部員に周知することに、時間がかかった。県と支部の連携についても、集まらないけれども、連絡を密にし、見通しをもって、計画的に取り組みたかった。

小豆支部 研究のあゆみ

1 研究主題 見方、考え方を働かせて、主体的に読む児童の育成

2 研究主題について

「読む力」の育成のために、物語単元の「読む力」に特化することで、各学年で「身に付けさせたい力」を系統立てた授業づくりができると考えた。どの単元でどのような力を身に付けさせればよいのかを明確にするための教材解釈、児童が課題意識をもって主体的に学ぼうとする授業づくり、読むために必要となる言語力や読むことの関心を高める環境づくりの3点に重点を置いて研究を進めることで、児童の「読む力」を育てていきたいと考えた。

3 研究活動の概要

(1) 4月21日(木) 土庄小学校

- ① 研究組織づくり
- ② 研究計画の立案

(2) 6月14日(火) 土庄小学校

- ① 11月の研究授業に向けての教材研究(グループ協議)
- ② 書写指導についての講話

(3) 11月25日(金) 土庄小学校

- ① 授業研究 6年

「文章を読んで理解したことから、物語のテーマについて自分の考えをもとう」
(『海のいのち』)

- ② 授業討議

指導者：東部教育事務所主任指導主事 池内 理恵

4 研究内容

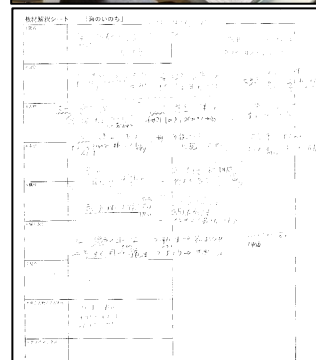
(1) 1回目の研修について(6月14日)

2回目の研修で扱う教材を実際に使って以下の流れで教材研究を行った。

- ① 教材解釈シートを活用して物語教材「海のいのち」を個々に教材解釈する。
- ② 個々に教材解釈した後、3～4人のグループで話し合い、付けたい力や指導の工夫などについてまとめる。

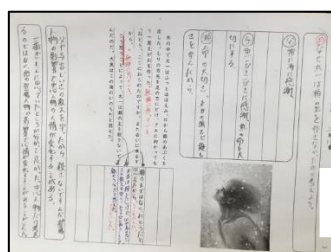
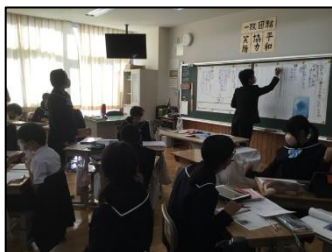
実際に教材解釈シートを活用しての演習は、新学習指導要領を踏まえた国語科の授業における単元構成の工夫や資質・能力を育成する授業づくりを行う上で、大いに役立つ研修になった。

- ③ 書写指導について、児童が個々に自分の課題を解決できるよう個別最適な学びを教師が心がけて指導することや、児童ののびを目標に照らして評価することを大切にすることを再確認することができた。



(2) 2回目の研修について(11月25日)

「文章を読んで理解したことから、物語のテーマについて自分の考えをもとう」(『海のいのち』)の授業研究を行った。1回目の研修で得た成果をもとに、授業者が児童の実態に合わせて指導法や教材を工夫しながら授業を行った。事前の教材研究によって、児童に提示する教材の検討がよくなされており、話し合いが活発に行っていた。教室には、前時までに身に付けた力を適宜振り返ることができるように分かりやすく掲示されていた。また児童のワークシートにも学びの記録がしっかりと残されていた。単元全体の学習の積み重ねを大切に、スモールステップでの確実な指導の成果が表れており、児童がその単元の内容を着実に理解し、習熟し、自信をもって話し合いに参加している様子がうかがえた。教材の内容、指導内容や指導する順序の検討、既習事項の定着を図る方法、タブレットの効果的な活用などの点において提案性があり、実り多い授業研究となった。東部教育事務所主任指導主事から、言語活動を見通した単元計画の工夫や交流活動の効果的な在り方、児童の見方・考え方を働かせるための発問の工夫、学びの深まりが確認できる振り返りの場の設定など、児童の深い思考を促す指導方法について具体的に教えていただいた。



(3) 成果(○)と課題(●)について

- 1回目の研修では、演習形式で、教材解釈シートを活用して教材研究をしっかりと行い、身に付けさせたい力や指導の工夫など教材がもつ特性を部会員全員で考えたので、その単元の教材解釈の分析を細かく行うことができた。部員が主体的に研修に参加でき、後の授業参観の視点が明確になった。
- 東部教育事務所主任指導主事である池内理恵先生から授業改善に向けて、全国学力テストの結果から「読むこと」の課題についても指導をいただいたことで、国語科授業づくりの理解をより深めることができた。
- 単元を通して子どもに身に付けさせたい力を明確にし、目指す目標に向かった授業づくりをより工夫する必要がある。単元計画の工夫や意図的な交流活動のしかけ、見方・考え方をどう捉えて指導をしていくか等で、深い授業展開を図ることがさらに大切であると考えられる。

5 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】

物語単元の身に付けさせたい力の系統性を再度見直し、子どもたちにどんな力をつけるために単元構成をどうするのか、指導法をどう工夫するのか等、きちんと把握することができた。

【今年度の研究での課題】

交流活動で自分の意見の発表だけに終わることのないように、教師の意図的なしかけを工夫し、必然的な話し合いが生まれるように、話し合いの観点を絞っておくことが必要である。